
フォトブック 第1話

夢未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォトブック 第1話

【Nコード】

N3586I

【作者名】

夢未来

【あらすじ】

ある高校で出会った、珊瑚と海。

2人はおたがいにひとめぼれし、恋がスタートする。
が、ある日珊瑚に異変が起こる。

その異変とは……？

感動ストーリーの第1話。

第1話

今日は高校の入学式。

かつこいい人はいるだろうか、中の良い友達はあるだろうか。

期待と不安を抱えたまま、私は家を出た。

いつもと違う。何かが私の心をざわつかせる。

うちの前の桜の木が、さわさわと揺れて花びらが舞う。

近所のバス停に乗る。・・・この時、もう私の恋は始まっていたのだろうか。

バスに乗ると、満員で座る席がない。あたしは人ゴミをかき分けながら、席を探す。

「バス動くよ？ココ、座れば？」

後ろから、声がした。

ゆっくり振り向くと、背の高い男の子が立っていた。

すごい金髪で、サラサラしてる。顔も・・・イケメン。

見た目は超不良っぽくて、ちょっと恐かった。

でも、きつと席をゆずってくれたんだから、優しいハズ。

「ホラ、早くっ」

「う、うんッ」

座ろうとすると、バスが動き出した。

あたしは突然の揺れに、よろめいて転びそうになった。

「ホラっ早く座んねえから？」

男の子が後ろから、私の肩を支えた。

「あ、ありがとう」

と、お礼を言っただけで座った。

男の子は、あたしの前に立ったまま鞆をゴソゴソいじっている。

鞆から、小さなデジカメを取り出すと、嬉しそうにモニターを眺め

ている……

その姿を見て、なんだか幸せになった。だってフツー、ケータイ出さない？こうゆう時って。

……んん？よく見ると、同じ高校……？だって、ネクタイ同じだし……

ズボンの柄も、あたしのスカートのチェックと同じ……

「桜宮高校前」

運転手さんのアナウンスが、車内に響く。

あたしと男の子は、同時にバスを降りた。

バスから降りると、男の子が振り返った。

「もしかして……同じ高校？そういえば、桜宮の制服じゃん。」

「はい。アタシ、気づいてましたヨ？」

「そっか。わりい。？あつ、そーいえば、名前は？」

「川島珊瑚です。」

「珊瑚？ふーん。変わってんなあ。」

「ハイ。おばあちゃんが付けてくれたんです。あ、名前聞いてもいいですか？」

「澤田海。俺もそこそこ変わってんだろ？」

「でも、カツコいいじゃあないですか。アタシ、好きですよ？」

「まぢろ？俺も、珊瑚って名前好きだよ？」

「あはは。あつ、急がないと遅刻ですよ？」

「だな。急ごう。」

……ホラ、悪い人じゃないじゃない。思ってた通りいい人。

あたしと海は、パタパタ走って学校に向かった。

入学式初日に遅刻なんて……ありえない。

ハアハア息を切らせて、門の所に飛び込んだ。

……セーフ。ちょうど、ゴツイ男の先生が門を閉めようとしていたところだった。

「すいませんっ？おはよーございますッ」

「コラあツツ??ちよつとこつちへ来いっ？」

先生は、あたしのことなんか見ようとしてもしないで海の方に駆け寄った。

「なんだ、その髪の色は。」

「ああ……すいませーん」

「すいません、じゃないだろ？職員室に来なさい？」

ああ〜海い〜（泣）ガンバレッ

あたしは海の事をかばってあげられなかったけど、式に遅刻する事の方が許せない。

猛ダツシュして、体育館の前に張り出されたクラス表を見る。

川島……

川……

あっ??あつた?

私はB組。B組かあ……そーいえば、海は……

なんでだろう……どことなく私は、海の名前も探していた。

澤田……

ん??もう、探し始めてだいぶたつけど、未だに海の名前は見つからない。

最後のクラスまできちんと見たのに……全然見つからない。

「もしかして、1年生？」

後ろで女の人の声がした。振り向くと、背が高くてモデルみたいな人が立っていた。

……綺麗……あたしが見つめていると、

「早く体育館に入つて。あ、あたし生徒会長の、山蘭美鈴です」

と、あたしにペコリとおじぎした。

あたしも慌ててペコツとおじぎした。

「鞆、持ったままでいいから。体育館入って、自分のクラスのところに座つてね？何組？」

「B組です。」

「B組ね。だったら……あの辺だと思つよ？」

ひとさし指で、体育館の前あたりを指さした。

「ありがとうございますッ？あ、あたし川島珊瑚っでいいです。」

「珊瑚ちゃんね。これからよろしくね」

「はい。こちらこそ、お願いします」

おじぎをして、さつき山園さんが教えてくれたあたりに座った。

.....

あたしは、先生の長い話を聞いている間、ずっと海のコトを考えていた。

.....

.....

やっと、長い式が終わった。生徒たちは、先生に誘導されてそろそろと歩きだした。

あたしもその流れにそって歩く。

ドンッ

ふいに誰かに思いつきり押された。あたしはよろめいて、隣の人にぶつかってしまった。

「いって・・・」

男の子が小さな声で、あたしに言った。

「すいませ・・・」

目があった。

「わッ、珊瑚じゃん？よかったなあ、間に合って。」

「なに、海、間に合ってなかったじゃん」

「髪、染められちゃってさ。」

そう言つて、指をさす海の髪は、真つくろに染まっていた。

「わあ・・・大変だねえ。金髪、似合ってたのに。」

「ホントだよッいちいちうぜーんだよなあ・・・」

ケラケラと笑う、海的笑顔になぜかドキッとする・・・

「1限目、サボらねえ？」

「ええッ??ダメだよお。」

「大丈夫だつて。ぜつてー見つからねえトコ、あるから。」

あたしの心の中で、たくさんの思いが揺れる。

「・・・行こつかな・・・」

あたしだって、先生の話が退屈なことぐらいわかってた。海の写真を見ると、断れない。断りきれない。

仕方なく、あたしは海の誘いをOKしてしまった。

海はあたしの手をひいて、屋上に連れて行ってくれた。

重い扉を開けると、幻想的な世界が広がっていた。

風がサワサワしていて、屋上から見る景色は最高だった。

「いいところだね・・・」

「だろ？」

「うん。気に入った。いいところ教えてくれてありがとうね」

「・・・まさか、そんなに喜ぶとは・・・」

「あつ、ねえ、海って何組なの？あたし1-Bだったんだけど。」

「俺？俺は、2-A」

「Aかあゝ・・・つて、ええっ??2年生ツ??」

「なんだよ、気づいてなかったのかよ」

「全然・・・同い年だと思って・・・」

どうりで見つからない訳だ。2年生だったなんて。

未だに理解できないーッッ

「珊瑚。」

「えっ？」

突然名前を呼ばれたから、驚いて振り向いた。

グイッ

海があたしの腕を引つ張った。

そして、あたしの肩を抱く。

・・・なッ、なんなのよおおッ???

心臓が、ばくばくしてる。

パシヤッ

「・・・へ？」

まぬけな声を出してしまったアタシ。

隣では、海が嬉しそうにデジカメのモニターを眺めている。

「どおだっ。いーだろ？」

「……………う、うんっ」

海があたしに、デジカメのモニターを見せてくれる。

海が隣で嬉しそーに、ピースしていて、あたしは隣で真っ赤な顔。

「ちょ、ちよつと待ってよ？その写真は、ダメ？」

「え？なんで？」

「な、なんでも？あたし、変な顔してるからっ？」

「別に、変じゃないよ？」

「変なのツツツ??？」

……………こんなの、海にドキドキしてる、って……………まるわかりじゃない。

……………

海がモニターをじつと見つめる。

そんなにまじまじと見ないでえツツ???

「珊瑚」

「もっつ、何よツ？」

「……………」

「海？何？」

「もしかして珊瑚、俺にドキドキしてない？」

「……………ハアツ??？」

……………ど、ど、どーすんのよ？なんでバレてんの???

「俺に、恋しちゃった？」

「す、す、する訳ないでしょツ??バカっ？」

「俺も、珊瑚に恋しちゃったもん。」

「もっつ、うるさいッ」

……………えっ……………?

オレモサンゴニコイシチャッタ……………?

「今、なんて……………？」

恐る恐る、海に聞き返してみる。

「だからあ、俺も珊瑚に恋しちゃった??って言うてんの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「返事は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「珊瑚ちゃん？」

「・・・・・・し・・・・も・・・・」

「えっ？なんて？」

「あたしもっ・・・・・・・・」

「ハイ、じゃあ俺ら両思いね？カップル成立？やったあ？」

海が嬉しそうに、ガッツポーズをする。

あたし・・・・どうしちゃったんだろう。

こんな、全然知りもしない相手の事、好きになるなんて・・・

もしかしてこれが、ひとめぼれってヤツ？

海はあたしの隣に座ると、あたしをギュッと抱きしめた。

「ちよ、ちよつと・・・・海い・・・・？」

「珊瑚、俺バスの中で珊瑚にひとめぼれしたんだ。」

「・・・・えっ？」

「一目見て、超可愛いつて。ほかにもいっぱい女子高生乗ってたけど、珊瑚だけ、なんか・・・・」

「あたしも、席ゆずってもらった時から、もう恋してたのかも。」

「・・・・まぢ？」

「うん、まぢ」

「俺、ひとめぼれとかはじめてだったんだ。」

「あたしもだよ・・・・」

「これからいっぱい、お互いのこと知って行こうな。」

「うん。知りたい、」

それから・・・・あたし達はいろんな話をした。

宝物はカメラって事、親が小さい時に離婚したこと、血液型や、誕生日。

将来は、カメラマンになりたい、って思ってること。

いろんな海を知った。もっともっと知りたい。

もっともっと知りたい。

もっともっと知りたい。

知れば知るほど、相手のことが愛しく思えて、もつと触れたくなくて、知りたくなるのは・・・なぜ？

あたしのことも、たくさん海に教えてあげた。

将来の夢は、保育士だって事。誕生日、血液型、家族のこと、ペットの事・・・

海は嬉しそうに、全部聞いてくれた。

きつと、海もあたしと同じ気持ちでいてくれるよね・・・？

今日は午前中だけで、授業は終わりだから、あたしと海が話している間に、

みんな帰ってしまい、いつの間にか夕方になっていた。

好きな人と居ると、時間が進むのが・・・早い。

まだ、海とあつてから1日も経ってないのに、もう海が大好きになっていた。

もう、海の事を知りつくしてしまったような気持ちになった。

それが嬉しかった・・・

もう、夕日が沈みかけている・・・

ガチャッ

ふいに、大きな物音がした。

「しっ・・・」

隣で海がこそつとあたしに言った。

あたしの口を塞いで、壁の後ろに隠れる。

どうやら、学校を見回っている警備員さんが来たらしい。

こんな遅くまで残っていたら、確実に怒られる。

謹慎になるかもしれない・・・

警備員のおじさんは簡単に見回りをするので、すぐに扉を閉めて、出て行ってしまった。

「やっと行った・・・」

「ウ・・・ミッ・・・」

「あつ、ごめんッ」

「はあっ・・・」

海にふさがれていて、息ができなかった。あたしは大きく息を吸い込んだ。

「まぢ、ごめんツ・・・大丈夫か？」

「うんツヘーキだよ？」

「もうちよつと・・・息、苦しくさせてもいいか？」

「・・・え？」

海が、あたしを抱きよせた。あたしはびっくりして、目が白黒してしまう。

「目、閉じて？」

海があたしの目を、手で隠す。

ドキ、ドキ、ドキ、ドキ・・・

心臓の音、聞こえちゃうかもっ

ふいに、唇にやわらかいものがあたった。

ああ・・・キスってこうゆうものなんだ・・・

海の顔が近い。胸が熱くなる。ドキドキして、恥ずかしくって・・・

あたしはいつの間にか、海の首に手を回し、海にしがみついていた。唇を離し、目を開ける。海の間を見るのが・・・恥ずかしい・・・海は、あたしの顎を軽く持ち上げて、さっきよりも深いキスをした。海の舌が入ってくる。舌を絡ませ、甘い吐息が漏れる・・・キスしてる間ずっと、あたしはどうしようもないこの感情に、耐えられなかった。

もう・・・表現のしようがない。好きで、好きで、好きすぎて。

何度も何度もキスをした。

海、初めてなのかなあ。いや、きっと誰かいるよね。元カノくらい。

だってこんなにかっこいいんだもん。

でも今、海はあたしの物・・・誰にも渡さないんだから・・・

そう、これが独占欲。

好きな人を、自分だけのものにしたい。

あたしは確実に、海に恋してる。

これからずっと、ずっと……好きだと思っ

第1話（後書き）

私は、まだ中学1年生です。

なのに、こんな小説を書かせていただいて、ありがとうございます。

この物語はまだまだ続きます。

これはまだ始りです。

これからもっと楽しくなります。

最後まで読んでいただかなくてもいいです。

少し目につけてもらっただけで、

私は幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3586i/>

フォトブック 第1話

2010年11月22日22時48分発行